

外国語科における教科の本質に迫る授業づくり

外国語科 水島 太一・田中 健太

1 教科の本質とめざす生徒の姿

グローバル化が急速に進展する中で、外国語におけるコミュニケーション能力は、一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定されている。また情報化が進み、オンラインでの交流はより身近なものとなり、世界中の様々な言語や文化を有する人々と容易につながることができるようになってきている。そして新型コロナウイルス感染症の感染拡大をきっかけに、オンライン交流の普及は加速している。

生徒は将来、より開かれた社会の中で、自分とは異なる言語やその背景にある異なる文化をもった人々と、交流したり、協力したりする機会を多くもつこととなる。また、SDGsの実現や、現在我々を取り巻く多くの課題の解決は一国でできるものではなく、国際的な協力が必要なものである。つまり、若い世代がよりよい世界を創っていくために、異なる言語、文化、考えをもつ他者と協働的に現代的諸問題や世界的な問題を解決し、主体的に国際社会を生きていこうとする姿勢が求められているのである。

だからこそ生徒には、外国語の授業を通じて、自分とは異なる言語や文化に興味をもってほしい。そして自分とは異なる言語やその背景にある文化をもった人々への配慮や、国際的な精神、多面的思考を身に付けることの大切さを感じてほしい。外国語を使って自分の考えや気持ちを伝え合ったりすることの喜びを味わい、外国語を身に付けることの必要性を感じさせたい。習得した知識や技能を生かし、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じる力を身に付けて行くことも、国際社会で生きていくためには大切である。ここに外国語科の本質があると考えます。

【外国語科における教科の本質】

主体的に国際社会を生きていくために、他者への寛容の精神や平和・国際貢献などの精神や多面的思考を涵養するとともに、目的や場面、状況等に応じて、外国語で互いの考えや気持ち、情報などを、言語材料を駆使して理解したり表現したり伝え合ったりすることができるようになること

【外国語科における教科の本質を踏まえた生徒の姿】

相手に配慮をしながら、目的や場面、状況等に応じて、外国語で考えや気持ち、情報を伝え合う中で、表現力を高めていくとともに、異なる考えを理解したり、言語や文化の壁を乗り越えたりすることの価値を実感している。

2 当校の生徒の実態と具体的な手だて

従前の授業の生徒の実態として、言語材料をうまく組み合わせる自分の考えや気持ち、情報を表現することができる一方で、変化するコミュニケーションの場面や状況に対応できず、うまく伝え合えない姿がある。他者と即興的に会話したり、課題解決に向けてやりとりをしたりする場面で、相手のねらいや主張をとらえたいうえで、相手に配慮したり適切な表現方法を使ったりして、コミュニケーションをとることができないのである。

そこで、目指す生徒の姿にするために、以下の手だてを講じる。

<手だてア>

外国語でコミュニケーションを行う必要性のある活動を設定し、場面や状況の変化に対応した表現方法を見通しをもって身に付けていく単元を構成する

変化するコミュニケーションの場面、状況に対応するためにはどうすればよいのだろうかという課題を見だし、生徒の目的意識を醸成させるために行う。単元の初めに、外国語を使う必要性のある、ゴールの活動の場面や状況を詳細に設定する。そこで授業者は、意味のある文脈を用意して、生徒にゴールの活動の場面や状況で、外国語を使ってコミュニケーションをとらせてみる。そうすることで生徒は、外国語で場面や状況に応じてコミュニケーションをとることの難しさを実感したり、上手に話したいという憧れを抱いたりするだろう。そしてゴールを達成するには、今の自分の外国語のコミュニケーション力では足りないことに気づき、見通しをもって必要な表現方法を身に付けていく。また、設定された場面や状況における相手のニーズや思いなどの踏まえるべき視点に着目し、他者への配慮が伴ったコミュニケーションを目指していく。

ときには、背景にある文化が異なることから生じる他者との考え、価値観、文化などのずれによる葛藤を生み出す状況を設定する。これにより、生徒は自分の考えが伝わらない理由が、表現方法だけではなく、他者の考え、価値観、文化などにあることに気づき、相手に配慮しながら新たな表現を見いだす。

<手だてイ>

仲間と表現し合い、その表現や内容を共有、吟味して、協働的によりよい表現を追求する活動を組織する

目的や場面、状況に応じて自分の考えや気持ち、情報を伝え合う表現を練習したり、よりよい考えや表現を共有、吟味したりして、表現力を高めるために行う。

生徒は、活動の目的を明確にもつと、自分の考えや気持ち、情報を相手と伝えたいという考えが強くなる。そこで、コミュニケーションの目的や場面、状況を基に、それらに応じたやりとりを練習する活動や、必要な表現方法の習熟を図る活動を設定する。そうすることで、既習の言語材料に加え、新たな言語材料を使いながら、単元の目標を達成するために必要な表現方法を身に付けていく。さらに毎回の活動の後には、仲間の表現や考えを共有し吟味することで、これまでになかった新たな表現や視点を得て、表現の幅を広げたり、考えを深めたりしていくのである。